

共通ガリシア語における人間を表わす 直接補語の前置詞 a の用法について

秦 隆 昌

§ 1 ガリシア語地域の歴史的、地理的および言語的事情

現在のガリシア語使用地域はポルトガルの北側に位置するスペインのガリシア地方、およびその隣接地域¹⁾であるが、このスペイン西北部とポルトガル北部(凡そ現在の Beira Baixa 県を除く Tejo 川以北の部分に相当する地域)は、XI 世紀においては、共に Castilla-León 王国の一部であり、Alfonso 6 世の統治下にあった。この時代、両地域はまた言語的にも連続していて、両者を隔てる境界線は存在しなかった。ここで使用されたロマンス語が古期ガリシア語であり、現代ガリシア語およびポルトガル語はこの同じ1つの源から派生したものである。1093年 Alfonso 6 世は女婿の1人 Enrique (ブルゴーニュ家)を Coimbra 伯に封じたが、この称号は後に Portucale 伯²⁾と改められた。彼の封土は Porto を中心とする Miño 川以南の地であり、この伯爵領の北限は現在のポルトガル北部の国境線、従って、ポルトガル語地域とガリシア語地域を隔てる境界線と一致する。ポルトガルは Enrique の子 Alfonso Henríquez (ポルトガル名 Afonso Henriques) の時代に Castilla-León 王国から独立し、更に XIII 世紀には現在のスペインとの国境線を確定している。

現代ガリシア語は言語的にはスペイン語よりポルトガル語に一層近い関係にあり、ガリシア・ポルトガル語として、イベリア・ロマンス諸語の中の1単位をなしている。しかし、ガリシア語使用地域は政治的には XII 世紀以後ポルトガルから切り離され、スペインの一部となって今日に到っている。従ってガリシア語がスペイン語から受ける影響も無視出来ない要素である。

以上のような歴史的、地理的、更には言語的事情があるため、ガリシア語の考察においては常にポルトガル、スペイン両語との関係に注意を向けなければならない。

§ 2 本稿で取り扱う問題

スペイン語では人間を表わす名詞、代名詞(但し、人称・再帰代名詞の弱形を除く)が他動詞の直接補語になる場合、一般の直接補語とは異なり、前置詞 a をつけて、間接補語と同じ形にする。ポルトガル語でも、かつてはスペイン語と同様に、この傾向が一般化していた時期があった。しかし現在では前置詞の使用はかなり制限されている。³⁾スペイン語とポルトガル語の間に相違が見られるこの現象がガリシア語ではどうなっているか、興味を持たれる所であるが、一般にガリシア語の文法書では、前置詞 a の用法の1つとして、「人間の直接補語を示す」という程度の説明がなされているに過ぎない。⁴⁾そこで本稿では、ガリシア語文の用例を集めて、整理し、それをスペイン、ポルトガル両語とも比較して、この現象について、より詳細な内容を明らかにしたいと考えている。

なお、ガリシア語の文例は大部分 Santiago de Compostela 大学ガリシア語研究所編の文法・講読書 GALLEGO (Tomos 1~3) から引用するものであるが、このテキストは一般の文学作品の断片も載録しているとはいえ、もともと共通ガリシア語の学習用に編纂されたものである。従ってそこに出て来る文例は、同ガリシア語研究所が認める「共通ガリシア

語」の基準を逸脱しないように選ばれているはずである。本稿ではこういう性格の文例を資料としてまとめを行なうことになるが、その結論が現実のガリシア語の種々相とどう関わるかは、更に検討を要する問題として残される。

§ 3 ガリシア語の文例

§ 3.1 非人称動詞 haber の直接補語

先ず存在を表わす動詞 haber の直接補語について見ると、この場合は例外なく前置詞 a を伴わない形が使われている。

- (1) Non hai *ninguén*, xa cho decía eu. 《誰もいないと私はもうお前にいていないか》(GALLEGO 2, p. 75)
- (2) En cada municipio hai *un alcalde*. 《各市には市長がいる》(*ibid.*, p. 180)
- (3) Unha vez había *un paisano*. 《昔々、1人の農夫がいました》(GALLEGO 3, p. 96)

§ 3.2 ter の直接補語

直接補語が定冠詞等の限定辞を伴わない普通名詞の場合には、一般に前置詞が使われていない。

- (4) Cando volveron xuntos a Vilanova, tiñan xa *un fillo*. 《彼らが一緒にピリャヌエバに帰って来た時にはすでに子供が1人出来ていた》(GALLEGO 1, p. 9)
 - (5) *¿Cántos fillos ten e cómo se chaman?* 《彼には子供が何人いますか、そして名前は何というのですか》(*ibid.*, p. 14)
 - (6) Enrique ten *moitos amigos*. 《エンリケには友達が沢山いる》(*ibid.*, p. 139)
- しかし、固有名詞が直接補語になっている例では前置詞が置かれている。
- (7) Vilariño ten por patrón *a Santiago*. 《ビラリーニョの村はサンティアゴを守護聖人にしてている》(GALLEGO 2, p. 201)

§ 3.3 一般の他動詞の直接補語

haber および ter を除く一般の他動詞の場合、その直接補語の品詞によって、また同じ品詞でも、定冠詞等の限定を受けているか否かによって、前置詞の用否に違いが見られる。従って、ここでは直接補語を幾つかの場合に分けて文例を整理してみたい。

§ 3.31 人称・再帰代名詞の強形の場合

直接補語が人称・再帰代名詞の場合、普通表現では弱形の対格を用いるので、前置詞の使用は問題にならないが、直接補語が強調される文においては、弱形の対格に更に前置詞 a + 強形を重ねた形、即ち重複補語が用いられる。また3人称⁵⁾においては、弱形だけではどの人物をさしているか分からない場合があり⁶⁾、その曖昧さをさけるためにもこの重複補語が用いられる。

- (8) *¿Quén te mete a ti neso?* 《君がどうしてその問題に関わる権利があるのか》(文字通り訳せば、《誰が君をその問題に関わらせるのか》) (E. Rodríguez González : Dic. enciclopédico ; "quén" の項)

- (9) *Nós podemos ir e a vós non vos deixan.* 《私達は行くことが出来るが、君達は許されない》(GALLEGO 1, p. 55)
- (10) *A eles leváronos pola rúa.* 《彼らは街路上を導かれて行った》(GALLEGO 2, p. 88)

§ 3.32 人称・再帰代名詞を除く一般の代名詞の場合

先ず、関係代名詞 *que* の場合は例外なく前置詞を伴わない形が用いられている。

- (11) *Lelo rezou con moita devoción por todos aqueles que non chegara a conocer, pro que foran tamén parte da súa familia.* 《レロは、それまで自分が会ったことはないが、やはり自分の一族の仲間であったそれらすべての人達(即ち、祖先)のために、ひたすら敬虔な気持で祈った》(GALLEGO 2, p. 64)
- (12) *Dixo que no tren aquel debería ter chegado un español que el quería recibir.* 《彼はその列車で自分が出迎えたいと思っている1人のスペイン人が到着したはずだと言った》(ibid., p. 242)

その他の代名詞の使用例はあまり多く見られなかったが、その数少ない文例の中では殆ど前置詞が使われている。

- (13) *Chame a quen sexa, chame ó millor médico do mundo.* 《誰でもかまいません、世界一の名医を呼んで下さい》(GALLEGO 1, p. 48)
- (14) *Ás tantas da noite, os señores de Souto Seoane abrían a porta da casa a modiño e caladiños pra non espertar a ningún.* 《夜も更けていたので、ソウト・セオアネ夫妻は、誰も起こさないように、そっと、無言のまま家のドアを開けたのだ》(ibid., p. 99)

次の前置詞が使われていない文例はかなり例外的なものである。

- (15) *¡Dou ó demo tanta lei e quen a inventa!* 《そんな法律やそれを考え出す人間は悪魔にくれてやるよ》(ibid., p. 70)

この場合、直接補語に前置詞が使われなかった理由として、私は次の2つのことを考えてみた。即ち、①同じ文中に間接補語 *ó demo* があるため、直接補語 *quen...* の前に *a* を置くと、間接補語と紛らわしくなる。②文中に直接補語が2つあり、前置詞を必要としない直接補語が先に来ているため、後続の、本来前置詞を必要とする直接補語までが同じ形をとって前置詞を落とした。この外にも理由が考えられるかも知れない。しかし、いずれにしても、断定的な結論を出すためにはもう少し同種の文例を集める必要がある。

§ 3.33 固有名詞、または定冠詞等の限定辞を伴った普通名詞の場合

後述する特殊な語連続の場合を除き、一般に前置詞が用いられている。

- (16) *Vin a Xan no bar.* 《私はバーでシャンを見かけた》(GALLEGO 2, p. 237)
- (17) *Carlos convidou a Remedios, Mercedes e Enrique a cear.* 《カルロスはレメディオス、メルセデスおよびエンリケを夕食に招いた》(GALLEGO 1, p. 78)

- (18) *Polo camiño atoparon a Antonio.* 《途中で彼らはアントニオに出会った》(GALLEGO 2, p. 37)
- (19) *Outras (cantigas) sirven pra adormentar ós nenos,*⁷⁾ *coa súa melopea monótona.* 《他の種類(の歌)はその単調な旋律によって子供達を眠らせるのに役立つものである》(GALLEGO 3, p. 66)
- (20) *O problema está, xustamente, en desbotar a ese enemigo.* 《問題はまさにその敵を追い払うことにある》(ibid., p. 64)
- (21) *Chamóu ó rente do seu leito ós nove fillos que tiña.* 《彼はベッドのそばに自分の9人の子供を呼び寄せた》(GALLEGO 2, p. 104)

ガリシア語では、動詞の不定形や-sで終る活用語尾、または-r, -sで終るある種の機能語の次に定冠詞+名詞が来る場合、先行語の語末の-rまたは-sが脱落し、更に定冠詞の頭に1がつけ加えられる。そしてこの場合正字法上の変化を受ける。これが先程ふれた特殊な語連続の場合である。《草を刈る》という表現を例にとりてその形を示すと、次のようになる。

- (不定形) : *segar + a herba → segá-la herba*⁸⁾
 (ti) : *segas + a herba → séga-la herba*
 (nós) : *segamos + a herba → segámo-la herba*
 (vós) : *segades + a herba → segáde-la herba*

この種の語連続の中で人間の直接補語が用いられる場合、定冠詞+名詞の前に前置詞は置かない。

- (22) *Teño que levá-lo neno á escola.* 《私は子供を学校につれて行かなければならない》(GALLEGO 1, p. 6)
- (23) *Ás veces veñen visitá-lo petrucio á casa dos antegros.* 《彼らは時々長老を訪ねて本家にやって来る》(ibid., p. 10)

§ 3.34 定冠詞等の限定辞を伴わない普通名詞、集合名詞の場合

調べた文例の範囲内で判断する限り、この条件に該当する直接補語は前置詞を使用しない場合が大部分を占めている。

- (24) *Sempre di que non quere que o enterren sin poder apadriñar algún tataraneto.* 《玄孫の洗礼の介添え役をつとめるまでは長生きしたいものだと言っている》(GALLEGO 1, p. 10)
- (25) *Ún que iba segar a Castela atopóu no camiño un señor moi luxoso.* 《カステリアへ刈り取りの仕事に行く人が、途中で、大変豪華な身なりをした紳士に出会った》(GALLEGO 3, p. 39)
- (26) *Polo camiño atopóu un home conocido.* 《途中で彼はある知人に出会った》(ibid., p. 48)
- (27) *Chegaba sin diñeiro, case sin francés e sin conocer persoa.* 《彼は金を持たず、フランス語は殆ど知らず、そして知り合いも全然いない状態でやって来たのだった》(GALLEGO 2, p. 242)

- (28) Como non hai serrerías mecánicas perto de Vilanova, tiveron que chamar *uns serradores portuguese* que andaban por alí. 《ピリャヌエバの近くには新式の設備のある製材所がないので、彼らはそこに来ている何人かのポルトガルの木挽き職人を呼ばなければならなかった》(GALLEGO 1, p. 70)
- (29) Certa muller encontrou *unha senhora* a carón dunha tenda. 《ある女性がある店のそばで1人の貴婦人に会った》(GALLEGO 3, p. 39)
- (30) Este é hoxe un costume dos que poucos teñen xa acordo na aldea, se quitamos *algúns vellos*. 《これは現在、その村では、幾人かの老人を除けば、ほんのわずかの^人達しか覚えていない習慣の1つである》(GALLEGO 2, p. 106)
- (31) Estaba o probe pai ensumido en cavilacións, pois acababa de recibir *un novo meniño*, moi repoludo e bonito, certamente, pro que non traía consigo a comida do mañá. 《かわいそうに父親は物思いに沈んでいた、というのは、彼は確かにまるまると太った、とてもかわい、赤ん坊をさずかったばかりであったが、その赤ん坊が自ら明日の糧を携えて来てくれた訳ではなかったからである》(GALLEGO 1, p. 14)
- (32) Hoxe se queres sacar *un enfermo* da casa, non podes. 《今日お前がたとえ1人の病人を家からつれ出したいと思っても、それは出来ない》(GALLEGO 2, p. 160)
- (33) Cando van no medio do río, ó ver *tanta xente* nun cabalo soio, di un dos *xinetes* asustado :... 《川の真中に来た時、たった1頭の馬にそれだけ大勢の人が乗っているのを見て、馬上の1人が驚いて次のようにいった……》(GALLEGO 3, p. 49)

以上はいずれも前置詞が使われていない場合である。前置詞が使われている次のような例は比較のまれにしか見られない。

- (34) Comprirá chamar a *algúns colegas* de Ourense ou de Santiago. 《オレンセカサントティアゴから幾人かの同業者を呼ぶ必要があるでしょう》(GALLEGO 1, p. 48)
- (35) D. Antón celebró o seu santo o 17 xaneiro, convidando a xantar a moitos dos seus amigos e tamén a *algún enemigo*. 《ドン・アントンは多くの友人と、それにまたある1人の敵を昼食に招いて、1月17日に自分の守護聖人の日を祝った》(GALLEGO 2, p. 117)

前置詞の用否を決定する何らかの条件があるか否か、これだけの文例では判断出来ないが、すでに述べたように、全体の比率からいえば、前置詞を使用しない例が圧倒的に多い。

§ 4. スペイン、ポルトガル両語との比較

§ 4.1 非人称動詞としてのスペイン語 *haber* およびポルトガル語 *haver* の直接補語存在を表すこれらの動詞の直接補語は、ガリシア語と同様、例外なく前置詞を伴わない形で用いられる。

(スペイン語の例)

- (36) Hay *mucha gente* en la plaza. 《広場には大勢人がいる》⁹⁾

- (37) *¿Cuántos alumnos hay en esta escuela?* 《この学校には生徒が何人いますか》
 (38) *Aquí no hay nadie que sepa italiano.* 《こゝにはイタリア語の出来る人は誰も
 いません》

(ポルトガル語の例)

- (39) *Há muitos espanhóis no Brasil.* 《ブラジルにはスペイン人が沢山いる》(Gramática II, p. 92)
 (40) *Na aula há apenas rapazes.* 《そのクラスには男子生徒しかいない》(ibid., p. 229)

§ 4.2 スペイン語 tener およびポルトガル語 ter の直接補語

スペイン語の tener は、直接補語が定冠詞等の限定辞を伴わない普通名詞の場合には前置詞 a をとらない。

- (41) *¿Cuántos hermanos tiene usted?* 《あなたの御兄弟は何人ですか》
 (42) *Ella tiene dos hijos y una hija.* 《彼女には息子が 2 人と娘が 1 人いる》
 (43) *Enrique tiene muchos amigos.* 《エンリケには友達が沢山いる》

一方 tener の直接補語が固有名詞、あるいは定冠詞等の限定辞のついた普通名詞の場合には一般に前置詞 a が用いられる。

- (44) *Tiene a su único hijo en Sevilla.* 《彼は一人息子がセビリアにいる》
 (45) *Los aztecas tuvieron a Cortés por una especie de dios.* 《アステカ人は最初コルテスをおある種の神と考えた》

ポルトガル語の ter の場合、直接補語が特定の人物をさしているか否かにかかわらず、一般に前置詞 a は用いられない。

- (46) *Nenhum amigo tenho na cidade.* 《私はその町には 1 人も友達がいない》(Gramática II, p. 189)
 (47) *Tenho a minha mulher¹⁰⁾ doente.* 《家内が病気なんです》(ibid., p. 237)

但し、ter ~ por ... 《~を... だと思ふ》の形で使う時には直接補語に a を前置する。

- (48) *Tenho à senhora¹¹⁾ por pessoa de confiança.* 《私は貴女が信頼出来る方だと思います》(ibid., p. 237)

§ 4.3 スペイン、ポルトガル両語における一般の他動詞の直接補語

§ 4.31 人称・再帰代名詞の強形の場合

一般的に言えば、スペイン、ポルトガル両語共、ガリシア語と同様、強調文において重複補語を用いる。

(スペイン語の例)

- (49) *No te busco a ti, sino a Juan.* 《私は君を探しているのではなく、ホアンを探しているのだ》

- 50) *A nosotros no nos invitan.* 《私達は招待されていません》
 51) *He venido a verle a usted.* 《私はあなたに会いに来たのです》

(ポルトガル語の例)

- 52) *Entre mim e ti escolhem-te a ti.* 《君と僕のうちでは、君の方が選ばれるさ》
 (Gramática II, p. 245)
 53) *Vi-o a ele na praça.* 《私は広場で彼を見かけた》(*ibid.*, p. 238)
 54) *Honramo-nos a nós mesmos.* 《私達は自分自身を誇りに思っている》(*ibid.*, p. 203)

しかしブラジルでは、会話文の中で、人称代名詞の3人称強形が、前置詞を伴わず、また弱形の重複も行われず、単独で用いられる例が報告されている。¹²⁾

- 55) *Vi você¹³⁾ na igreja, vovó.* 《僕おばあちゃん(あなた)を教会の中で見たよ》
 (*ibid.*, p. 160)
 56) *Acho você mais magro.* 《君は以前よりやせたね》(*ibid.*, p. 160)
 57) *Viu ele na praça.* 《私は広場で彼を見かけた》(*ibid.*, p. 238)
 58) *Achei ele na rua.* 《私は通りで彼女に出会った》(*ibid.*, p. 238)

所で、ブラジルの会話文では、普通表現の場合、伝統的な決まり文句を除き、一般的にはあまり弱形を用いず、人称代名詞の直接補語を全く使わないですませる傾向がある。¹⁴⁾

§ 4.32 人称・再帰代名詞以外の代名詞の場合

スペイン語では一般に *a* を前置する。

- 59) *¿A quién buscas?* 《君は誰を探しているの》
 60) *No quiero ver a nadie ahora.* 《私は今誰にも会いたくない》
 61) *Voy a llevar a algunos de mis alumnos al desfile.* 《私は自分の生徒の中の何人かをパレードにつれて行くつもりです》

但し、関係代名詞の *que* は例外である。

- 62) *Aquél es el viajero que vi ayer en la estación.* 《あの人は私が昨日駅で会った旅行者です》

ポルトガル語では疑問・関係代名詞 *quem* の場合を除き、一般に前置詞の使用がかなり制限されている。

- 63) *Não sabem a quem perguntar.* 《彼らは誰に尋ねたらいいのかわからない》
 64) *O porteiro a quem chamou está aqui.* 《彼が呼んだドアマンはここにいます》
 65) *Não vi ninguém.* 《私は誰にも会わなかった》
 66) *uma senhora que vi* 《私が会ったある夫人》
 67) *a mãe do pequeno o qual encontrei* 《私が子供に出会った、その子供の母親》

§ 4.33 名詞の場合

スペイン語では一部の例外的な場合を除き、一般に前置詞がよく用いられる。

- (68) Encontré a Juan en la calle. 《私は通りでホアンに出会った》
(69) ¿No has visto a Enrique en la escuela? 《君は学校でエンリケに会わなかったかい》
(70) El doctor no visita a sus enfermos hoy. 《今日先生は往診されません》
(71) Voy a consultar al profesor sobre el asunto. 《その問題について先生に相談して見るつもりです》
(72) Él conoce a un joven rumano. 《彼はあるルーマニア人の青年を知っている》
(73) Ayer encontré a unos viajeros ingleses en el parque. 《昨日私は公園で幾人かのイギリス人旅行者に出会った》
(74) Esta tarde voy a visitar a un amigo enfermo. 《今日の午後私は病気の友達の所へ見舞いに行く予定だ》

所で、スペイン語の文法書でこの前置詞の用法を説明する時によく次の A. Bello の文例が引用される。

- (75) Fueron a buscar un médico experimentado, que conociera bien las enfermedades del país. 《彼らは、その国の病気について熟知している経験の豊富な医者を探しに行った》(A. Bello : Gramática, § 893)
(76) Fueron a buscar a un médico extranjero que gozaba de una grande reputación. 《彼らは令名高いある外国人の医者を探しに行った》(ibid.)

この2つの文の直接補語である「医者」は文の聞き手にとっては共に未知の人物として示されており、従って両文共に不定冠詞が使われている。一方、文の主語と直接補語の関係から見ると、両文の条件は異なっている。即ち、文例(75)では主語にとって「医者」は不特定の人物であるのに対し、文例(76)では特定の人物である。この表現内容の違いをスペイン語では前置詞 a の用否によって表わしている。

この外にも前置詞を使用しない場合が若干あるが、その条件については様々な説明が行なわれており、研究者の間に意見の一致が見られない所がある。ただ、前置詞を使用する場合の方が圧倒的に多いことは確かである。

次にポルトガル語については、Vázquez Cuesta と M. A. Mendes da Luz が問題を整理しているので、先ずその内容を要約してみよう。¹⁵⁾

a. 直接補語が前置詞を伴わない動詞

aclamar 《推戴する》, convidar 《招待する》, cumprimentar 《挨拶する》, felicitar 《祝福する》, nomear 《任命する》。

(例)

- (77) Convidei o seu irmão a almoçar conosco. 《私は彼の兄(弟)を私達と昼食を共にしよう招いた》(Gramática II, p. 237)
(78) Nomearam Ministro o seu vizinho. 《彼の隣人が大臣に任命された》(ibid., p. 237)

b. 直接補語が常に前置詞を伴う動詞

aconselhar 《忠告する》, *agradar* 《喜ばせる》, *ajudar* 《助ける》, *assistir* 《世話する》, *negar* 《否認する》, *ordenar* 《指揮する》, *pedir* 《もとめる》, *perdoar* 《ゆるす》, *renunciar* 《見捨てる》, *sacrificar* 《犠牲にする》, *suplicar* 《懇願する》¹⁶⁾

(例)

(79) *Pediram ao teu irmão*¹⁷⁾ *por ti*. 《彼らは君の代りに君の兄さん(弟)に助力を頼んだ》(*ibid.*, p. 239)

(80) *Perdoa aos teus inimigos*. 《汝の敵をゆるしなさい》(*ibid.*, p. 239)

c. *chamar* 《呼ぶ》について

直接補語が単独で用いられる場合は前置詞を伴わないが、補語が属詞と共に用いられる場合には前置詞が置かれる。

(例)

(81) *Quem chama o gerente?* 《誰が支配人を呼んでいるのですか》

(82) *Chamei ao homem mentiroso*. 《私はその男をうそつきと呼んだ》

d. *ensinar* 《教える》について

補語として教える相手の人物だけが示される文においては、その人物は前置詞を伴わない直接補語の形で表わされる。これに対して、教える相手と教える内容の両方が示される文においては、その人物は間接補語になり、従って前置詞が用いられる。

(例)

(83) *O professor ensinava os alunos*. 《先生はその生徒達を教えていました》(*Gramática II*, p. 237)

(84) *O professor ensinava Geografia aos alunos*. 《先生はその生徒達に地理を教えていました》(*ibid.*, p. 237)

e. 前置詞 *a* を伴った関係代名詞の先行詞には更に前置詞をつけない。

(例)

(85) *Admiro as pessoas a quem não abalam os reveses da fortuna*. 《非運にめげない人々に私は敬服する》(*ibid.*, p. 238)

f. 主語と直接補語が紛らわしい時は、直接補語に前置詞をつけて、両者の区別を明瞭にする。

(例)

(86) *Venceram os bons aos maus*. 《善人が悪人に勝った》(*ibid.*, p. 238)

以上の説明の中には言及されていない重要な動詞がかなりあり、これだけの内容では不十分なので、もう少し名詞の直接補語を含む文例を拾ってみたい。

(直接補語に前置詞が使われない例)

- (87) *Andavam a buscar um médico.* 《彼らは医者を探していた》
(88) *A rapariga busca sua mãe.* 《その少女は母親を探している》
(89) *Conheci sua mãe.* 《あなたのお母さんにお目にかかりました》(Gramática II, p. 132)
(90) *Quási não conheço uruguaios.* 《私はウルグァイ人には殆ど知り合いがありません》(ibid., p. 229)
(91) *Encontrei o teu irmão hoje de manhã.* 《私は今朝君の兄(弟)さんに出会った》(ibid., p. 236)
(92) *Tem visto o meu irmão no Porto?* 《君は僕の兄(弟)にポルトで会ったのか》(ibid., p. 230)
(93) *Vi o homem na rua.* 《私はその男を通りで見かけた》(ibid., p. 236)
(94) *Todos os cinco dias vou visitar minha mãe.* 《私は5日毎に母に会いに行きます》(ibid., p. 136)

(直接補語に前置詞が使われている例)

- (95) *O homem deve amar a Deus.*¹⁸⁾ 《人は神を愛さなければならない》
(96) *Ficam noivos. Isto aprazeu aos parentes.* 《彼らは婚約した。このことは親類の人達を喜ばせた》

Vázquez Cuesta 等の立てた規則以上のことは断定的にはいえないが、全体として見た場合、ガリシア、スペイン両語に比べ、ポルトガル語の前置詞の使用比率が著しく低いことは、これらの文例によって十分明らかである。

§ 5. 結 び

以上の文例の比較により、共通ガリシア語の直接補語の前置詞の使用傾向に関しては概略次のことがいえる。

1. ポルトガル語は前置詞の使用を大幅に制限し、一方スペイン語はその使用をかなり徹底した形で行なっているが、共通ガリシア語はその中間にあって、スペイン語に一層近い傾向を示している。
2. 共通ガリシア語では直接補語が固有名詞、あるいは定冠詞等の限定辞を伴った普通名詞の場合には、スペイン語と同様、一般に前置詞を使用する傾向にあるが、-r, -s + 定冠詞 + 名詞の語連続の中ではそれを使用しない等の不徹底さがある。

また、直接補語が定冠詞等の限定辞を伴わない普通名詞の場合には、むしろ前置詞を使用しないことが多い。これは、この種の直接補語の場合にも前置詞を比較的頻繁に使用するスペイン語とは対照的である。

以上の点を除けば、ガリシア、スペイン両語における前置詞の使用傾向は概ね同じである。

註

1. Oviedo, León および Zamora 県の西端部がこの地域に含まれる。
2. この Portucale なる名称が国名 Portugal の起源である。
3. È. Bourciez : *Éléments de linguistique romane*, § 381.
4. Instituto de la Lengua Gallega : *GALLEGO* 2, p. 237.
5. 本稿での人称の区別は便宜上動詞の活用形に従って行なうことにする。このため敬称の 2 人称代名詞 *vostede(s)* は 3 人称の中に含まれる。
6. 例えば、弱形対格の *o* は《彼を》《それを》の意味でも《あなた(男性)を》の意味でも使われる。
7. 本稿で資料として使用した *GALLEGO* では、前置詞 *a* に定冠詞が続く時は表記上次の縮約形を用いている。

(男性単数)	$a + o \rightarrow \acute{o}$
(男性複数)	$a + os \rightarrow \acute{os}$
(女性単数)	$a + a \rightarrow \acute{a}$
(女性複数)	$a + as \rightarrow \acute{as}$

この中、男性形の $o(s)$ (= / $o(s)$ /) と $\acute{o}(s)$ (= / $o(s)$ /) の間には音韻的区別があるが、女性形の $a(s)$ と $\acute{a}(s)$ の間にはその区別がない。その違いは単に表記上のものである。ちなみにガリシア語の単母音々素は次の 7 つである。
/a/, /ε/, /e/, /i/, /ɔ/, /o/, /u/
8. Real Academia Gallega の暫定的正字法では、この場合 *segar a herba* 等をそのままの形で表記する。しかしこれは正確な音を表わさないので、*GALLEGO* では実際の音に対応する形に表記を改めている。(*GALLEGO* 1, pp. 6-7 参照)
9. 本稿ではスペイン語、ポルトガル語の場合、一般の文法書等に見られる文例は特に引用個所を示さない。
10. ポルトガル語では前置詞 *a* と定冠詞女性単数形は同じ形になるが、この場合の *a* は定冠詞である。
11. ポルトガル語で前置詞 *a* の後に女性定冠詞の *a*, *as* が続く時は \acute{a} , \acute{as} と表記する。この場合 $a(s)$ と $\acute{a}(s)$ は音韻的にも区別される。
12. P. Vázquez Cuesta & M. A. Mendes da Luz : *Gramática Portuguesa*, Tomo II, p. 160 ; E. W. Thomas : *The Syntax of Spoken Brazilian Portuguese*, pp. 96-99 ; J. Mattoso Câmara, Jr. : *Êle comme un accusatif dans le portugais du Brésil*, *Miscelânea Homenaje a A. Martinet "Estructuralismo e historia"*, vol. I, pp. 39-46.
13. 本稿では 3 人称の動詞をとる親称の 2 人称代名詞 *você* を便宜上 3 人称の中に含める。
註 5 参照。
14. E. W. Thomas : *op. cit.*, pp. 97-98.
15. P. Vázquez Cuesta & M. A. Mendes da Luz : *op. cit.*, pp. 236-239.
16. Vázquez Cuesta および Mendes da Luz がこれに該当する動詞としてあげたものももっと数が多いが、その中には *faltar*, *obedecer*, etc. のように人間の直接補語をとらないと思われる動詞も含まれているので、それらは省いた。
17. ポルトガル語では前置詞 *a* の後に定冠詞男性形 *o*, *os* が続く時は *ao*, *aos* と表記する。

この場合 o(s) と ao(s) は単母音と2重母音の対立によって音韻的に区別される。

18. 前置詞 a との関係においては《神》も《人間》と同じ文法的カテゴリーにはいる。しかし E. W. Thomas は《神》(Deus) を直接補語に a がつく特別の名詞としてあげている。
(*The Syntax of Spoken Brazilian Portuguese*, p. 256 参照)

BIBLIOGRAFÍA

- Aleina Franch, Juan & Manuel Blecua, José : *Gramática española*, Barcelona, 1975.
- Bello, Andrés & Cuervo, Rufino J. : *Gramática de la lengua castellana*, ed. completa, esmeradamente revisada, corregida y aumentada con un prólogo y frecuentes observaciones de Niceto Alcalá-Zamora y Torres, 5-a ed., Buenos Aires, 1958.
- Bourciez, Édouard : *Éléments de linguistique romane*, 4-e éd., révisée par l'auteur et par les soins de Jean Bourciez, Paris, 1956.
- Câmara, Joaquim Mattoso, Jr. : *Êle como un acusativo dans le portugais du Brésil*, Miscelânea Homenaje a A. Martinet "Estructuralismo e historia", vol. I, ed. por Diego Catalán Menéndez Pidal, Univ. de la Laguna, 1957, pp. 39-46.
- : *The Portuguese Language* (translated by Anthony J. Naro), Chicago, 1972.
- Carballo Calero, Ricardo : *Gramática elemental del gallego común*, 3-a ed., Vigo, 1968.
- García de Diego, Vicente : *Elementos de gramática histórica gallega*, Burgos, 1906.
- Gili y Gaya, Samuel : *Curso superior de sintaxis española*, 7-a ed., Barcelona, 1960.
- Instituto de la Lengua Gallega, Univ. de Santiago de Compostela (ed.) : *Gallego*, Tomos 1-3, Santiago de Compostela, 1971-1974.
- Keniston, Hayward : *Spanish Syntax List*, New York, 1937.
- Martínez Amador, Emilio M. : *Diccionario gramatical y de dudas del idioma*. Barcelona, 1974.
- Nunes, José Joaquim : *Compêndio de gramática histórica portuguesa* (Fonética e morfologia), 6-a ed., Lisboa, 1960.
- Rodríguez González, Eladio : *Diccionario enciclopédico gallego-castellano*, Tomos I-III, Vigo, 1958-1961.
- Thomas, Earl W. : *The Syntax of Spoken Brazilian Portuguese*, Nashville, Tennessee, 1969.
- Vázquez Cuesta, Pilar & Luz, Maria Albertina Mendes da : *Gramática portuguesa*, 3-a ed. corregida y aumentada por Pilar Vázquez Cuesta, Tomos I-II, Madrid, 1971.